

Costume and Textile

No.27

服飾文化学会会報

2014年3月

●事務局移転のお知らせ

平成26年2月1日に学会事務局を以下に移転しました。

新事務局住所：173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1東京家政大学服装史研究室

担当者：能 澤 慧 子

連絡先：電話番号 03-3961-8273, e-mail nohzawa@tokyo-kasei.ac.jp

2014（平成26）年度 第15回服飾文化学会大会のお知らせ

会員の皆様にお送りしましたお知らせのように、2014（平成26）年度 第15回総会・大会を下記のとおり開催いたします。多くの皆様にご参加下さいますようお願い申し上げます。

記

開催日 2014年5月17日（土）・18日（日）

開催校 女子美術大学相模原キャンパス
〒252-8538 相模原市南区麻溝台1900

【研究発表】2号館2階講義室

【展 示】10号館1階スタジオ

【見学】女子美アートミュージアム

1. プログラム

5月17日（土）

13：30～15：20 特別講演 2号館2階講義室

演題 トークイベント「THE SHOES」

講師 館鼻則孝氏

「NORIATAKA TATEHANA」の

クリエイティブディレクター

講師 高田邦雄氏 株式会社キサ代表

15：30～17：10 研究発表

17：20～17：50 総会

18：00～19：30 懇親会

（2号館1階 学生食堂）

5月18日（日）

9：30～12：00 研究発表

12：10～ 昼食

10号館1階女子美アートミュージアムにて開

催中の「高田喜佐 ザ・シューズ展」を自由
見学。（大会参加者は入場無料）

13：30～14：30 作品・ポスター展示の説
明・質疑（展示会場にて）

※作品・ポスター展示時間

5/17-13：30～5/18-14：30

※作品・ポスター展示ショートスピーチを研究発
表会場で行います。詳細は送付します。

2. 参加費

大会参加費	会 員	3,000円
	非 会 員	4,000円
	学生会員	1,000円
	学生非会員	1,500円
懇親会費	会 員	4,000円
	非 会 員	4,500円
	学生会員	2,000円
	学生非会員	2,500円
昼食代（5/18）		1,050円

3. 発表・参加申込

（1）発表申込締め切り日 2014年4月2日（水）

①既にお送りした「発表者へのお知らせ」
（2種）に沿って、第15回大会・総会実行
委員長 岡田宣生までEメールにてお申し
込み下さい。（必着）

②発表形式には、口頭発表・ポスター展示・
作品展示の3種があります。

③発表は未発表の研究報告で、発表者は共同発表者とも本会会員に限られていますので、非会員の発表希望者は学会ホームページから入会手続きをお願い致します。

(2) 要旨原稿締め切り日 2014年4月30日(水)

(提出先: embdry@venus.joshihi.jp)

- ①用紙: A4縦置き、横書、1枚
- ②余白: 上25mm、下30mm、左右30mm
- ③文字: 10.5ポイント、明朝体

(3) 参加申込・払込締め切り日

2014年4月30日(水)

ゆうちょ銀行 当座口座: 〇一九 (019)

口座番号: 0586593

加入者名: 岡田宣世 (オカダノブヨ)

4. 特別講演について

女子美アートミュージアムにて開催中の「高田喜佐ザ・シューズ展」のトークイベント「THE SHOES」を、女子美アートミュージアム・服飾文化学会共催といたします。高田喜佐の靴作りと館鼻則孝のクリエイションについて語っていただく対談形式です。

◆ 講師 館鼻^{たてはなのりたか}則孝氏

東京芸術大学卒、自身のファッションブランド「NORIATAKA TATEHANA」のクリエイティブディレクター。1985年生まれ。

花魁の履く下駄をモチーフとした踵の無いヒールレスシューズの作者として知られる。シュタイナー教育に基づく人形作家である母親の影響で幼い頃から手でものををつくることを覚え、15歳の時より洋服や靴の制作を独学で始める。東京藝術大学では絵画や彫刻を学び、後年は染織を専攻し、花魁に関する研究とともに、日本の古典的な染色技法である友禅染を用いた着物や下駄の制作を行う。2010年、自身のファッションブランド「NORITAKA TATEHANA」を設立。全ての工程が手仕事により完成される靴は、ファッションの世界にとどまらずアートの世界でも注目されている。LADY GAGAやDAPHNE GUINNESSに作品が愛用^{たかたかくにお}されていることでも知られている。

◆ 講師 高田^{たかたかくにお}邦雄氏

上智大学理工学部卒、株式会社キサ代表。1943年生まれ。

大学卒業後、商社・百貨店に勤務した後、展覧

会・文化イベント・商業文化ビル・地域振興などの企画会社、高田事務所を設立。東京・青山スパイラル、福岡・天神イムズなどの企画・プロデュースに参加している。現在は姉、高田喜佐の後を引き継ぎ、株式会社キサの代表を務める。母は詩人の高田敏子。

5. 自由見学

◆ 「高田喜佐 ザ・シューズ展」

「靴はファンタジー」を実践してきたシューズデザイナー高田喜佐のクリエイションの軌跡と多彩なライフスタイルを、靴・デザイン画・写真などで紹介する展示。

【開館時間】 5月17、18日10:00~17:00 (入館は16:30迄) 開館時間中、自由にご見学下さい。

6. アクセス

- ① 小田急線「相模大野」駅北口より
バス(女子美術大学行)約25分
- ② JR横浜線「古淵」駅より
バス(女子美術大学行)約20分

7. 連絡先

服飾文化学会 第15回総会・大会実行委員会
〒252-8538 神奈川県相模原市南区麻溝台1900
女子美術大学
デザイン・工芸学科工芸専攻研究室刺繍コース
Tel&Fax 042-778-6810
実行委員長: 岡田宣世
(embdry@venus.joshihi.jp)

2014年度総会のお知らせ

第15回大会において、総会を開催いたします。正会員の方は、5月10日までに、出欠を記載した返信はがきを事務局へ返送してください。

日時: 2014年5月17日(土) 17:20~17:50

会場: 女子美術大学相模原校舎

2号館2階講義室

議事(予定):

- ・平成25年度事業報告、決算報告、監査報告
- ・平成26・27年度役員選挙結果報告
- ・平成26年度事業計画案審議、予算案審議

特集記事 博士論文 「紅型研究」の再構築—琉球紅型のイメージと実像— 概要

須藤良子（女子美術大学美術館）

沖縄を象徴する「紅型」は当地で制作される染織品で、主に型紙を使用して染色したものである。模様は杜若や桜など和のイメージを与える作品が多いが、今日ではハイビスカスなど南国をイメージしたデザインもある。また、「紅型」は現在の沖縄古典芸能衣裳としても欠かすことができず、鎖大模様型の鮮やかな衣裳を着用している。

このような紅型だが、王国時代にどのような人々に、どのような場面で着用されていたのかを示す記録は非常に少なく、具体的な紅型像というものを描く事は難しい。しかし、今日紅型について書かれた研究書などによれば、王妃が礼装として着用していた、芸能衣裳として用いられていた、といった歴史的事柄が記されている。文献が乏しいにも関わらず、このような言説はどのようにして構築されるに至ったのであろうか。本論では、先学の「紅型研究」を検証し、今日の紅型のイメージに至る過程を浮き彫りにし、王国時代の真の実像に迫ることを目的とした。

第一章では、王国時代から近年までに「紅型」について書かれた記述を検証し、疑問点を再確認した。その結果王国時代には「形付け」と称されていた染物が本土の鎌倉芳太郎によって「紅型」と名付けられた事が確認でき、以下の4つの疑問点が抽出された。

1. 江戸上りでの琉球使節の装束や芸能衣裳に「形付け」が着用されていたとする説の真偽
2. 御冠船芸能での芸能衣裳に「形付け」が着用されていたとする説の真偽
3. 「形付け」が上流階級夫人の礼装であったとする説の真偽
4. 「首里型」と「那覇型」の違いや具体的な事例の提示が未だなされていないこと

第二章では、江戸上りや御冠船芸能で実際にどのような衣裳を着用していたのかを検証するため、1832年（天保3）の江戸上りでの冠服と芸能衣裳、1838年（戊辰）の御冠船芸能での衣裳を調べた。その結果、江戸上りにおいては王国時代の礼装で臨み、御冠船芸能では、今日見られるような華やかな「形付け」衣裳の着用を認めることはできなかったことを絵画、文献資料から明らかにした。

第三章では現存する紅型衣裳を検証し、王国時

代の実像を示した。

現存作品と琉球王家に伝世する紅型衣裳、文献などを比較検証し、型付けは王家では通常着であったこと、一方で諸士町百姓までの幅広い階級に紺染一方型などが許されていた事を明らかにした。また、実態の分らなかった「那覇型」の調査を進めた結果、尚家に伝来する大柄の洗練されたデザインとは趣を異にする、素朴で細かい模様の紅型が浮き彫りになった。二つは同じ技法であるが、与える印象が異なる。すなわち、洗練され鮮やかな紅型の「首里型」に対する、「那覇型」と結論づけ、実作品を提示した。そしてこの「那覇型」こそが庶民に許された「形付け」であったと考察した。

第四章では王国時代の実像と今日的イメージとのギャップがいつ頃に生じたのかを検証した。その結果、江戸上りなどで演じられた宮廷芸能が琉球王国滅亡（1879年）とともに変容し、庶民階級の芸能となったこととの関連性を指摘した。宮廷芸能を享受する階層が琉球の士族階級や大和の武士、中国冊封使から庶民へと変化するにつれ、衣裳も庶民に好まれる華やかな「紅型」が取り入れられた。それは王国の滅亡に伴い衣服制度が崩壊し、誰もが自由な服装を享受できる余地が生じたことも一因であると考察した。

さらに、本土の「紅型」研究者であり収集家でもある鎌倉芳太郎らによって紅型の収集と美術品としての鑑賞が推進されたことが、芸能衣裳としての「紅型」の役割に拍車をかけたことを指摘した。

大正14年に鎌倉芳太郎によって「紅型」と名付けられた「形付け」はこの時より、本土の人々に認識された。一方「紅型」が廃れかかっていた沖縄では「形付け」に「紅型」という名が与えられた事で、人々の捉え方に変化があらわれた。紅型は王国時代の文脈から離れ、歴史的文化的な混乱の中で、「形付け」が「紅型」になり、王妃の礼装であった、芸能衣裳であったという学説が生じた。そしてその後の研究では、これらの定説を疑うことなく継承し、今日の「紅型像」を形作ったことを実証した。

※論文は、平成13年3月20日に日本女子大学人間生活研究科において博士（学術）を取得したものです。

2013 (平成25) 年度 論文発表会の報告

今年度の論文発表会は、2014年2月28日(金)に跡見学園女子大学(文京キャンパス、最寄駅、茗荷谷)にて開催した。14時に開会、会場は2号館3階の2302室という教室である。開会30分前頃から、会場は徐々に埋まって、最終的には78名の参加者を得ることができた。まず、会長の岡田先生より開会の辞を賜った。その後、途中、15分の休憩をはさんで、以下の7件の卒論発表が行われた。

<プログラム>

卒業論文

座長 福田博美(文化学園大学)

1. 冠位十二階の文化史的意義

—古代中国・朝鮮文化の影響の中で—
四戸 菜穂(共立女子大学)

座長 大塚有里(東京家政大学)

2. ハンガリーの民族衣装に施されている

刺しゅうについて

—ウエディングドレスの製作—
森 未也加(文化学園大学)

座長 大網美代子(大妻女子大学)

3. 漫画家中村明日美子が描く

ロリータファッションについて—実物製作—
八木 明日香(文化学園大学)

座長 常見美紀子(京都女子大学)

4. エル・リシツキーとロシア構成主義

栗田 哲希(杉野服飾大学)

座長 宮武恵子(共立女子大学)

5. これからのファッション業界に必要なことは何か

—GUCCIにみる社会的責任貢献度と
企業の存続性—
阿多 美保子(跡見学園女子大学)

座長 田中淑江(共立女子大学)

6. 現代に伝わる紙衣の歴史

—白石和紙を中心に—
田村 美穂(文化学園大学)

座長 能澤慧子(東京家政大学)

7. 大正時代は可愛いのか

—雑誌『少女の友』広告より—

大久保詠美子(日本女子大学)

最初の発表は、共立女子大学の四戸菜穂さんによる「冠位十二階の文化史的意義 —古代中国・朝鮮文化の影響の中で—」であった。冠位十二階には、思想の面で中国の影響、衣服形態の面では朝鮮の影響が色濃く見られるという興味深い指摘がなされた発表だった。

2番目は、文化学園大学の森未也加さんによる「ハンガリーの民族衣装に施されている刺しゅうについて—ウエディングドレスの製作—」であった。ハンガリーの民族衣装に特徴的な刺繍を調査分析し、その中からマチヨー地方の刺繍図案と技法を参考にして、ウエディングドレスのデザインに発展させた研究であった。座長より実物をぜひ拝見したいという言葉があり、従来の論文発表会では、会場校にて、ボディなどで実物展示も同時に行っていたことを知り、この点を、本学では実施できなかったことが悔やまれた。毎年、実物製作の発表が行われるので、できるだけ実物展示が行えるようにするほうが、発表者にとっても、参加者にとっても有益であろうと感じた。

3番目は、文化学園大学の八木明日香さんによる「漫画家中村明日美子が描くロリータファッションについて—実物製作—」である。漫画家の作品と世界観を調査分析し、キャラクターが身につける衣裳をデザイン、製作した研究であった。

4番目は杉野服飾大学の栗田哲希さんによる「エル・リシツキーとロシア構成主義」であった。ロシア構成主義のデザイナーであるリシツキーをとりあげ、服飾だけでなく絵画や建築など幅広いデザイン活動について論じた発表であった。

休憩をはさんで、5番目には、本学の阿多美保子さんによる「これからのファッション業界に必要なことは何か—GUCCIにみる社会的責任貢献

度と企業の存続性」であった。ファッション業界のCSR（企業の社会的責任）に関心を持ち、特にGUCCIの活動について調査した研究であった。

6 番目には、文化学園大学の田村美穂さんによる「現代に伝わる紙衣の歴史－白石和紙を中心に－」であった。宮城県白石市の白石和紙を用いた伝統的な紙衣の歴史とその意義を繙き、それが三宅一生のような現代のファッションデザイナーたちによって新たな展開を見せていることを論じた。



最後は日本女子大学の久保詠美さんによる「大正時代は可愛いのか－雑誌『少女の友』広告より－」であった。大正時代の雑誌広告に描かれる事物や言説を分析し、この時代に「かわいい」という美意識の源流をみることができるかを論じたものであった。

全体として、非常に活発な質疑応答が行われたのが印象的である。学生たちの発表自体も、しっかりと準備が行き届いており、充実したものであったが、その上に、質疑応答の時間には、ほぼすべての発表に質問がなされ、発表者たちがみな的確な応答をしていたのが、好印象であった。各大学での日ごろの研究指導の賜物であるのだろうと感心した。最後に閉会の辞を、長田美智子副会長より賜った。長田副会長は、全体の講評も述べてくださり、各大学から服飾を対象とする非常に多岐にわたる視点から（洋の東西、過去から現代・未来へ）の研究が発表されていたことがよかったと高く評価して下さった。有意義な論文発表会であったことを、参加者全員と共有して、

会を閉じることができた。

その後、場所を1号館1階の学生食堂に移して、懇親会を16時半から17時半までおこなった。懇親会の司会は、論文発表会担当の福田博美理事が務め、乾杯の発声は伊藤紀之監事がおこなって下さった。懇親会にも多数の参加をいただき、論文発表会全体の熱気がそのまま続いているような感じであった。特に、大学の垣根を超えた学生たちの活発な交流がそこかしこで見受けられ、盛会であったと思う。発表者たちの達成感に満ちた笑顔も頼もしく感じた。

全体を通して感じることは、論文発表会の意義の大きさである。準備段階の12月から2月というのは、各大学ともに、学期末試験や入試等の繁忙期であり、この時期に学会の小さな大会とも言えるこのような行事をおこなうことには、少なからぬ労力をともなうものではあるが、学生たちが学生生活の集大成としての論文や研究を、他大学の学生や教員の前で発表できる場があるというのは、非常に貴重な機会であると思う。また、他大学における服飾研究がどのようなものであるのかを、客観的に知り、そのことによって、自らの研究そのものの位置づけを、学生たちが確認する場にもなっていると思われる。初めて担当した筆者としては、できるだけ担当係の仕事を省力化、あるいは分担化しながらも、地道に、学会の活動の重要なひとつとして、この論文発表会が続いていたら、と思っている。また、学生を指導している大学教員のひとりとしては、できるだけ、毎年、発表できる学生を出せるよう、日ごろの教育に励まなければならない、とあらためて思った。また、今回ひとつ残念であったのは、修士論文の発表がなかったことであり、今後、各大学の修士課程を修了した学生たちの発表が、活発に行われるようになることを期待したい。最後に、今回、学生たちに発表を促して下さった会員各位をはじめ、快く座長を引き受けて下さった理事の先生方、そして、会長、副会長、同じ論文発表会担当の福田先生、塚田先生、ご協力下さった皆様に、お礼を申し上げたいと思います。

（論文発表会担当 内村理奈）

2013 (平成25) 年度 研究例会の報告

平成25年度研究例会は11月30日(土)、東京都千代田区の共立女子大学で開催された。「若手の研究発表会」と題して、2名の研究者による発表が行われた。出席は学会員34名、非学会員5名。講演内容は次の通りです。

江戸時代の小袖模様における「負」の模様

岡松 恵 (奈良女子大学 博士研究員)

従来、模様における吉祥性の研究は、模様によせる人々の信仰や精神性を解明するものとして行われてきた。特に衣服に付される模様は“模様を着る”ことになるため、吉祥性を有することが重要と考えられている。しかし江戸時代の小袖模様をみると、少数ではあるが、恐ろしげな模様や悲劇を題材にした模様が存在し、疑問が生じる。このような模様も、布が貴重な時代に敢えて小袖に入れられたことから、吉祥模様と同じく着用者の心理と強く結びついたものであり、恐怖や不幸といったマイナスの状況をどのように捉えてきたかを服飾面から探る手がかりになると考えられる。そこでこの種の“吉祥の周縁”に位置する模様を「負」の模様と仮称し、私の研究対象としてきた¹。本発表ではそのうち三例を論じた。

一例目には小野小町の模様を述べた。小町に関する模様には、美貌の歌人としての小町を題材にしたものが多いが、老いさらばえて打ち捨てられた小町や、小町に妄執した深草少将の悲恋など、吉祥性を重視するならば用いられないような題材もある。そのような模様を検討した結果、和歌一筋であった小町の生きざまや、深草少将の真摯な態度に対する人々の共感がみられた。

二例目には三輪の模様を取り上げた。この模様は、高貴な男(三輪山の神)と娘との婚姻の破綻の物語である「苧環伝説」に関するもので、糸をひいた苧環と杉の群生の組み合わせで表される。

苧環伝説は、和歌や能楽、浄瑠璃などにも取り入れられており、それらと比較検討した結果、三輪の模様は娘の純愛に焦点を絞り、杉と苧環の模様に再構築したものであると考えられた。

三例目は南天と枕の組み合わせ模様について述べた。この模様は「邯鄲の枕」の暗示と考えられる。この故事は、仙人から借りた枕でうたた寝した青年が、夢の中で人生の繁栄と没落を体験し、諦観を覚えるというもので、目出度い内容ではない。しかし小袖模様では、この枕を南天と関連づけることによって、貴重なもの、すばらしいものという意味を付加している。なぜなら南天は本来大木になりやすく、大きく育った南天からつくられた枕には希少価値があると考えられたためである。

以上、本研究では負の模様のうち、遺品や雛形に資料が複数あるものを選び、当時の記述や文学作品などから関連事項を集め、比較検討を行った。そこから浮かび上がった小袖模様の独自性に、当時の人々がその模様をどのように解釈したか知る鍵があった。つまり負の模様とは、運命や生死に対し表面的な幸・不幸に拘るのではなく、人間の生き方そのものに共感するという態度が表れた、いわば人生を哲学的に捉えた模様で、その解釈の多様性や深みに「豊かさ」があると理解できるものであった。

¹ これまでの研究に以下のものがある。

①「夜着における模文様 - 万治から元禄期の小袖模様雛形本を資料にして」2007.9『服飾美学』第45号, pp.37-54 ②「御所解文様に見る通小町の表現 - 屋形のない車の文様を中心に - 」2008.2『服飾文化学会誌』Vol.8No.1, pp.49-58 ③「小袖文様に見る奈良 - 三輪の文様を中心に - 」2008.2『奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集』18, pp.118-129 ④「小袖類に見る南天の文様」2008.3『人間文化研究科年報』第23号, pp.349-258 ⑤「江戸時代の小袖模様に見る負の豊かさに関する研究 (博士論文)」2009.1奈良女子大学大学院人間文化研究科 ⑥「小袖にみる杉と苧環の模様」2009.2『服飾文化学会誌』Vol.9 No.1, pp.17-29



質疑応答風景 司会 長崎巖先生 黒川祐子氏 岡松恵氏

日本におけるロンドン・パンク・ファッションの受容

黒川祐子（東京家政大学他非常勤講師）

筆者はこれまで16世紀を中心とする切り裂き服に焦点を当て研究を行ってきたが、本研究では、これまで研究対象とされることの少なかった20世紀のファッションに目を向け、服の切り裂きをそのスタイルの主な構成要素とするパンク・ファッションをテーマに取り上げた。1970年代後期ロンドンに起こったパンク・ファッションは、日本にも伝播し、現在も日本の若者のスタイルとして根付いている。そこで本研究では、1970年代後期から90年代後期の約20年間を調査対象とし、イギリスにおけるパンク・ファッションの生成と変容、及び日本におけるパンク・ファッションの受容と展開という二つの課題を解明することにした。

服の切り裂き、安全ピン、原色を用いたメイク、チェーンや釘付きの首輪といったアイテムからなるパンク・ファッションが、パンク・ロックを支持する「パンクス」を象徴づける装いとしてロンドンに現れたのは、1976年冬のことであった。またパンク・ファッション誕生の背景には、ミュージシャンであるマルコム・マクラーレンとデザイナーのヴィヴィアン・ウエストウッドが、彼らが経営していたショップの商品を、マルコムがプロモートするパンク・ロック・バンド「セックス・ピストルズ」のメンバーに着せたことが大きく関わっていた。セックス・ピストルズのステージでの装いを見たファンたちが、これらを真似たことがきっかけとなり、1977年秋にはこのような装いが、ロンドン・ストリートで賑わいを見せるようになる。しかし初期のパンク・ファッションは、1970年代末期から80年代初期にかけ、

「ハード・コア・パンク」のスタイルへと変容していく。これは、たくさんの鉤を打ちつけた黒革のジャンパーに、中央部の髪を逆立てた「モヒカン・ヘア」のスタイルに特徴づけられるものであった。また1980年代に入ると、ヴィヴィアン・ウエストウッドも、これまでの反抗をあらわにする作品表現を改めるようになり、現代の正統派の衣服製作には見られない服作りをすることで、既成概念への拒否の意思を表すようになったのである。特に1985年以降、彼女はイギリスの衣服に伝統的な素材やテーラリングの技術を生かしたフェミニな作品をコレクションで発表するようになった。

一方日本におけるロンドン・パンク・ファッションに関わる報道は、1977年の春にはじまることになる。しかし多くの日本人はその過激なイメージに起因して、1970年代末期、パンク・ファッションを表面的にしか受け入れることができなかったのである。しかし1980年代の雑誌報道を通じロンドン・パンク・ファッションの誕生に関わったヴィヴィアン・ウエストウッドと彼女の作品に対する認識を深めた日本人は、1990年代に入り、70年代後期から90年代に至るまでの彼女のさまざまな作品の要素を取り入れた、日本に特有のパンク・ファッションを生成することになる。日本人はイギリスのパンク・ファッションをそのまま受容したというよりは、むしろヴィヴィアン・ウエストウッドというデザイナーの作品の感性に共鳴し、それらとパンクを結びつけた独自のファッションを新たに生み出したのである。

2014年度夏期セミナーのお知らせ

日程 8月6日(水)～8日(金)

新幹線新神戸駅発、淡路島から四国徳島に渡り、以下の見学等を計画しています。全行程バスチャーターで移動します。

- 1日目 淡路島人形座(人形浄瑠璃)見学
夕方 徳島ホテルにてレクチャー
(徳島サンルートホテル泊)
- 2日目 長尾織布合名会社くしじら織り>、藍の館、佐藤阿波藍製造所<見学予定>
(徳島サンルートホテル泊)
- 3日目 大鳴門橋架橋(渦の道・記念館)、大塚国際美術館(西洋美術陶板画)

***** 会員より *****

■ 展覧会

○「ヨーロッパ・モード」

会期-2月7日(金)～5月24日(土)

*4月6日(日)開館(2月14日、28日、
4月25日、5月16日は
19:00まで開館)

会場-文化学園服飾博物館

18世紀の華やかなドレスから、多様なスタイルが打ち出された20世紀末まで、約250年間のヨーロッパの女性モードに焦点を当てます。18世紀のロココ時代にはモードは限られた女性だけのものでした。しかし、20世紀にはその担い手は大衆へと移り、さらに流行の発信もヨーロッパからの一方向ではなくなりました。そこには、社会構造の変化や産業の発達、女性の意識変化などのさまざまな要素がからみあっています。今回は子供服や男性の衣装も交えながら流行を振り返ります。

○「高田喜佐 THE SHOES」

会期-4月6日(日)～6月8日(日)

会場-女子美アートミュージアム

問合せ: bsk@venus.joshiibi.jp

○公募展 第66回三軌展

会期-5月14日(水)～26日(月)

*20日は休館

会場-国立新美術館 東京六本木

■ 近著紹介

*『琉球紅型のイメージと実像』 須藤良子
角川学芸出版 4月下旬刊行予定

*『中世後期の香文化』 本間洋子著
思文閣出版 A5判・448頁
本書は香を焼き鑑賞する催しである香会と香木・薫物を香文化として捉え、香道の発生期の一次史料を基に、中世後期の香文化を解明している。香道についての初めての実証的な歴史的研究書。

***** 事務局より *****

● 新入会員

(平成25年10月1日～26年2月1日)

正会員

長 沢 幸 子 (文化学園大学)

学生会員

高 須 奈津子 (共立女子大学)

● 会費納入のお願い

平成26年度会費のお振り込みを宜しくお願い致します。

振込先: 郵便振替口座00150-7-184189

服飾文化学会

(会費: 正会員6,000円、学生会員3,000円)

会報 No.27: 2014(平成26)年3月31日発行

編集発行人: 服飾文化学会

事務局: 173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1

東京家政大学服飾史研究室

TEL: 03-3961-8273

E-mail: nohzawa@tokyo-kasei.ac.jp

URL: <http://www.fukusyoku-bunka-gakkai.jp>